



現代と歴史学

稲葉 伸道（日本史学）

高校生だった頃、歴史が好きで日本古代史や中国史の本をよく読んでいました。人間の歴史がどのように展開してきたのか、それが現在にどのようにつながっているのか、空想をめぐらすのは大変楽しく、興味がつきませんでした。近年、「歴女」という言葉があるようですが、女性・男性を問わず、また、年齢を問わず、歴史愛好家は以前から多いと思います。さて、大学で歴史学を学ぶということは、そうした歴史「好き」とは次元が違うところがあります。古文書や古記録など、歴史資料を読み説く能力が先ず基礎として必要とされます。これが為されていないのは歴史学として問題外です。この能力は努力を積み重ねればある程度のところまで到達します。その大前提の上で、もうひとつ必要なことがあります。自分の視点を持ち、過去の歴史の事実をできる限り追究し、その結果得られたどのような事実に対しても謙虚に受け止め、逃げることなく誠実に向き合うことです。それがたとえ現代社会を生きる私達にとって、忘れていたい、あるいは関心の外にあってほしい不都合なことであってもです。70年前の先の戦争に敗北したことに向き合い、きちんと受け止めること、先の敗戦だけではなく、あらゆる過去の歴史に、まともに向かいあうことによって、はじめて、私達が生きている時代全体、国家、地域、社会、経済、思想、文化が理解できるのではないのでしょうか。そこから、今、大切にすべきことが見えてくる。これから歴史学を志す若い人たちには、歴史学からそのような過去と対話する際の「志」も学んでほしいと思います。



学生たちの研究生活—File22

「しょっぱい行政——塩専売の行政から歴史を見る」

研究室名：東洋史学研究室

東洋史学はアジア全域の歴史を研究する学問です。歴史の研究は主に文献史料を利用して行いますが、史料の入手は既に出版された史料を研究室・図書館において利用するにとどまらず、研究対象の事物が位置する地域で行う史料調査もよくあります。

夏休みに中国四川省へ史料調査に行きました。調査の目標は近代中国の塩政についての公文書資料です。塩政というのは政府が塩の生産・販売を管制する専門的行政です。塩はごく普通の調味料ですが、なぜ政府が塩の生産・販売を行政で管制するのか、そしてなぜ私は塩政を研究するのでしょうか。

人は毎日、塩を使った料理・醤油・味噌を食べて、人体に不可欠なミネラルを補充しなければなりません。この必要性により塩の利益は政府に狙われたのです。政府は塩の生産・運輸・販売を管制して税金を得たが、その管制は容易ではありませんでした。脱税防止のため、生産地を全面的に支配しなければならないし、生産業者の個人情報・資産状況などを把握しなければならない。さらに商人の運輸ルー

ト・販売地・販売期限を定め、密輸取締のために各地で税関・巡査部隊を配置していました。これらの管制を実現するには、強力な社会支配システムを維持しなければなりません。



(清代・西秦会馆 [塩商会館] 四川省自贡市)

したがって、塩政を手がかりとしてさまざまな情報を得ることができます。上述の管制がどのくらい実現したかを通じて、国の地方支配の程度が分かる。政府の塩政に対する重視の度合いから当時の財政状況が分かる。塩商人と政府との関係を通じて民間人と政府との関係が分かる。販売の価格・売上などの状況を通じて社会経済の状況が分かる。食塩の専売制度は現在の中国において依然として存在し、塩政の研究を通じて現在中国の状況の歴史的背景が分かる。このような理由で、私は塩政を中心に中国近世・近代史を研究しているのです。

[謝 祺 (博士後期課程2年)]

学生たちの研究生活—File23

外国の文学を知ること

研究室名：フランス文学第2研究室

「フランス文学を研究して何が分かるの？」今回は、この質問に私なりに答えてみます。文学を研究すると、人間について知ることができます。これが数ある答えのうちの1つです。私が所属しているのは、フランス文学第2研究室。そんなわけで、今度は私からこんな質問をしてみます。「フランス文学作品を読んだことがありますか？」。



「ある」という人もいれば「フランス文学って例えば？」という人もいるかもしれません。有名どころでいえば、「オペラ座の怪人」や「レ・ミゼラブル」。「星の王子さま」もフランス文学です。これらの作品に感動したり、感心したりと、心を動かされた人は多いはず。では、なぜ、フランス文学は日本に広く受け入れられているのでしょうか？フランスは日本と宗教も文化も違います。不思議ですよ。今回は難しい文学史は無しにしましょう。単純に考えれば、「現代の日本に生きる私たちにも共感できる部分があるから」。それは作者が綴った葛藤であったり、愛情であったり、思想であったりします。私たちの研究室では、そんなフランス文学作品を読解し、「人間を知る」ための研究をしています。実際、私が今研究している作品は、ある作家の愛情の記録です。彼は好きな人に想いを伝えるために叙情豊かな作品を書き上げました。これだけを聞くと、「ロマンティックね！さすがフランス！」と思われるかもしれません。しかしながら、そんな彼と恋人の実生活はというと……？

この先は、皆さんがフランス文学第2研究室においでくださった時にお話ししましょう。どうしても気になるという方は、ぜひアンドレ・ジッドで検索してみてください。フランス文学は、研究していけばいくほど、人間が逃れることのできない痛々しい生への発見で溢れ、とても楽しいものです。

[山田 あい (博士前期課程1年)]

最近の文学部

旅立ちの季節

「ご覧、運河の水面に／あの船たちが眠るのを／移り気で、さすらい気分で」(ボードレール「旅への誘い」)。論文審査を終えた学生たちが新たな進路に向けて旅立つ日が近づいています。巻頭コラム執筆者の稲葉先生も今年で名大文学部を去られます。春の訪れは大学では寂しさも伴うのです。(YK 記)